

(縁・円・援)

兵庫えんだより

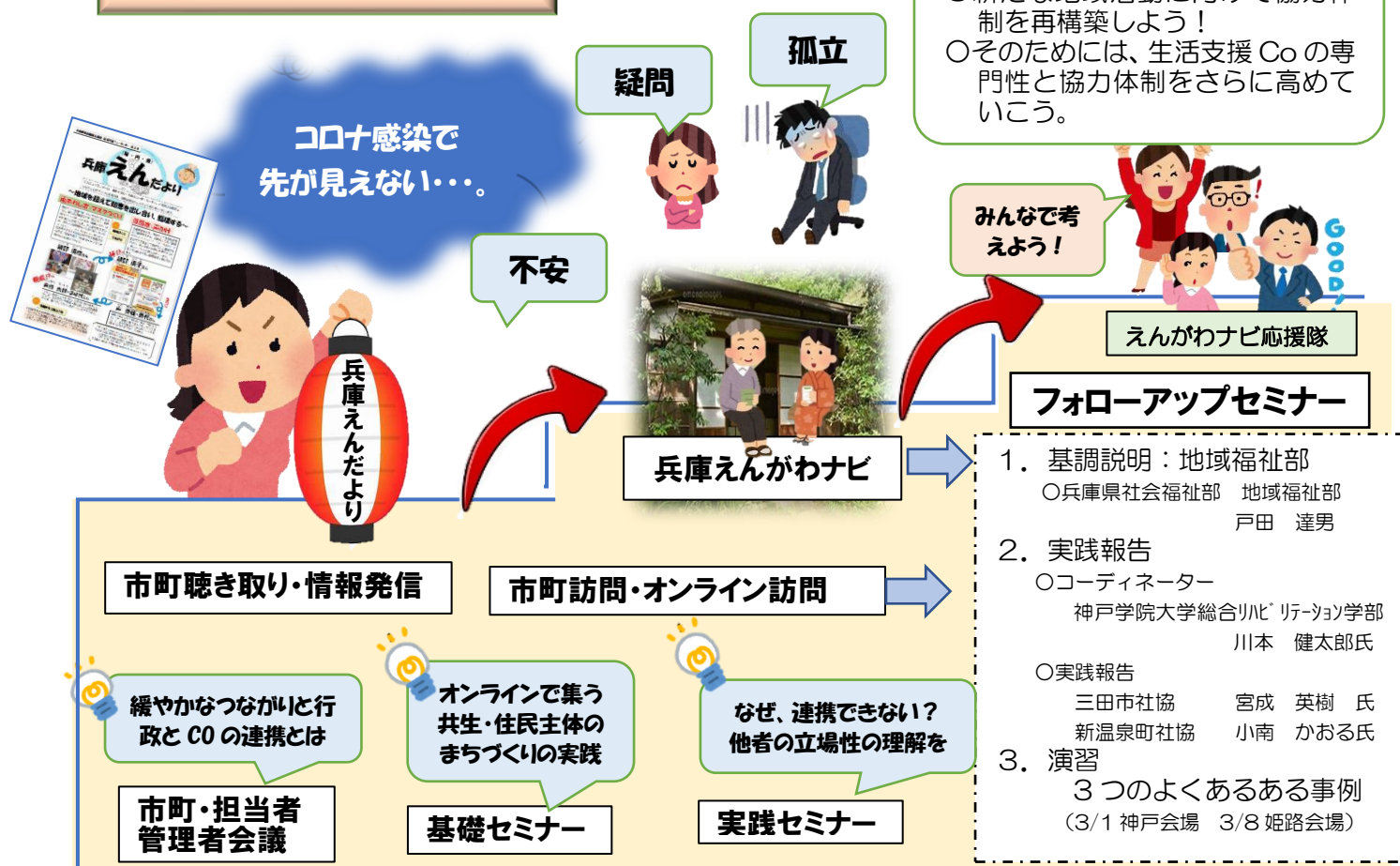


このニュースレターは、市町社協の生活支援コーディネーター、住民等が創意工夫しながら行われている生活支援、地域活動をお伝えするために発行いたします。

コロナ禍で行きついたフォローアップセミナー

昨年の新型コロナウイルスの感染拡大から一年が過ぎようとしています。4月から県内の聞き取りを行い、情報発信として「兵庫えんだより」を発行し、迷いながら、オンライン等も取り入れながら研修を行いました。そして、会えない分、もっと声を聞こうと「えんがわナビ」を開催すると、今まで表面化していなかった1層Coの役割の不明確さや孤立等が見えてきました。今年度のフォローアップセミナーではこのような課題をさらに深めていきました。

コロナ禍における県社協での取り組み



【お知らせ（研修紹介）】

「生活支援コーディネーター養成 Zoom オンライン研修」
(全国コミュニティライフサポートセンター)
https://www.clc-japan.com/sc_kenshu/index.html

【発行元】(令和3年3月30日発行)

〒651-0062 神戸市中央区坂口通2丁目1番1号
兵庫県社会福祉協議会 地域福祉部
TEL 078-242-4634 FAX 078-242-0297
E-Mail: chiiki-2@hyogo-wel.or.jp (担当: 山下・永坂)

令和2年度 フォローアップセミナー 違いを知ろう!! あなたができないのではない。

【基調説明】兵庫県社協 地域福祉部長戸田 達男

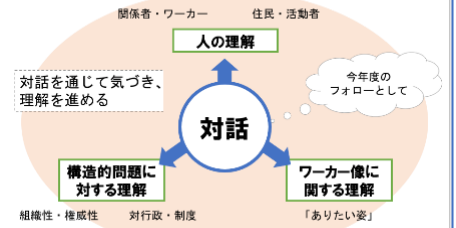
これまでの
事業の流れ

コロナ禍での
県社協の動き

えんがわナビで
見えてきたもの

「志向性」の違い
を理解しよう

今回のセミナーのキーワード



対話1: コロナ禍の影響: ビデオで事前に事例報告: じっくり対話

◎2層Coがモデル的に取り組んだものを全市的に拡大
◎さっちゃんのみごころおすそ分け等
◎2層Coが1層Coに望むもの…1層Coは管理職でない等



三田市社会福祉協議会
1層Co
宮成氏



神戸学院大学
川本先生



新温泉町社会福祉協議会
2層Co
小南氏

◎高齢化率40%のまち、地域だけでは支えられない、ボランティアの育成
◎コロナで新しいつながりができた
◎活動が進むにつれ2層Coが活動。1層Coが報告を受ける側になってきた。



○報告しても評価されないことで疲弊する。
○グランドデザインを描く。1層Coは考える旗振り役。進捗管理ではない。
○報告書だけではなく、普段の対話が担保されているか。
○専門職の関係が変わってくる。構造的なものとして変わるタイミング。
○県社協他、他市から後方支援を受ける。1人で悩まない。仲間の集まりが必要



対話2: 「あるある事例」ロールプレイで気づきいっぱい

事例

1. 経験・所属の違う1層Coと2層Coの会議の行方
2. 小学校の校長先生が来所。地域の活動を見に行ったら1層Coは…
3. 自治会長はがんこなのか?それとも…?

意見

○1層Coから
・2層Coと一緒に地域に行きたい。
・グランドデザインは1層Co、2層Co、地域住民と一緒に考える。
・経験のある2層Coから聞かれてもすぐに答えられない1層Coの気持ちがよくわかる。

意見

○2層Coから

- ・なんでも1層Coに報告、相談し、現場を見に来てもらおうと思った。
- ・話し合いや勉強会の開催(生活支援体制整備事業等)
- ・それぞれの山(目標・目的)の理解。共通の山(目標)を住民に理解できるように説明できたらいい!

○行政担当者等から

- ・担当地区の住民さんを訪ねていく
- ・2層Coの役をして気持ちがよくわかりました。

対話3: 川本先生 & 戸田部長



○1層Coの感情移入は重要な気づき。行政等の経験が浅い1層Coは、地域にでると戸惑う。地域は行政と真逆の時もある。2層Coとも意見が合わず孤立ということがあがる。この事業で重要なのは、自分たちのソーシャルワークが正しいと思っていると間違えることがある。フィードバックすること、疑問を持つことが大切。ただ、振り返る機会は作りにくい。まず自分はどうだったか、職場、えんがわナビ等で他市とコミュニケーションを取ることは大事。

○連携することを目的化することは基本的には逃げることになる場合も。責任主体をあいまいに回避するときに連携という。誰が責任をとるのか、問題は何か、問題によって苦しんでいるのは誰か、誰が責任を取るのか整理していくことが必要。“連携”から“協働”へ。

川本先生からの「エール」: 1人で抱え込まないで!!

A氏の悩みをB氏・C氏でも考える。これをコミュニティだと思ってください。県社協の後方支援、学者は横やり支援。今起きていることを1人で悩まないで。ワーカーの問題ではない。構造的、環境的要因が大きい。私かわるい、能力がないと思わないで。



一年を振り返って、これから行いたいことが見えてきた!!

【フォローアップセミナーを振り返って】参加した方の意見+これからこんなことしたい!

第10回 R3.3.17 「えんがわナビ」 で出た意見

○今年度は、生活支援 Co の声を積み上げてきた研修になりました。
次年度以降、新しい人が入っても、できないことをできるようにするように、選択できるような学びの場や、何を学びたいか、それをするにはどうしたらいいのか学びの開発が必要です。
○住民のペースに寄り添う 2 層 Co の気持ちがよく分かりました。これからは攻めでなく、待ちの姿勢になればいいと思います。
○方法は様々でも、同じ山を登っていることを確認できる機会があればいいな。
○そのほかに、各市町の生活支援 Co の会議見学、生活支援体制整備事業の視察ツアー、うちのこの事業、見て! シリーズ等をしたという意見が出ました。

コロナ禍でまだ回りきれませんが、県内の活動紹介します

県内の生活支援コーディネーターの活動を訪問しながら見てきました。コロナ禍で悩みながらも活動を続ける生活支援 CO や地域の活動がたくさんありました。今回紹介できるのは、ほんの一部です。これからも随時、紹介していきます。

コロナがあっても

ここがポイント!

柔軟な発想

○「プチサロン」：ミニデイよりもっと小さなサロン。小さな仲間なら困ったと言える。申請も報告もスマホでチェックのみです。簡単にすることで 4~5 人でも申請でき自然発生的に増えました。いつでも集い、いつでも辞められる気軽さがうけています。助成金は一回 2000 円ですが、これは女子会や男性のちょっと集まるきっかけになる絶妙な値段です。小さい集いは役割が分かれていません。一体となってお客でなく手分けできます。そこで「実はな…」と本音を言い出すこともあります。ケーブルテレビの出演や、いきいき百歳体操にもつながっています。(朝来市社協)

協議の場づくり

ここがポイント!

つながりを切らない

○「集い場つどえば」：集い場交流会
つどい場同志のつながりが大切と子ども食堂等の代表者も含み、つどい場だけの住民が集まっています。「どうしているの?」「こんなのありますか?」と社協作成のやさしくて大きな地図を囲み地域の資源の発掘や詳細を紹介しあいます。(尼崎市社協)
○「わくわく地域づくり塾」：協議の場づくり
住民の社会参加の不安や疑問等を「これからの楽しい地域づくりシリーズ」(4 回)としてコミセン区と共催で開催。今後も他の地区に拡大していく予定です。(播磨町社協)

生活支援 CO 会議の工夫

ここがポイント!

工夫力

○体験型「専門員会議」：2 か月に 1 回。1 層 Co はいないが行政職員も入り、目的を明確にした会議。12 名の 2 層 Co の情報交換のあと、住民の協議の場に活かせるように「サイコロトーク：あましゃきょうのすべらな〜い話」「カードトーク：おはなしポロリ」等を利用した意見交換を体験します。「ここでは失敗してもいいから」と担当者はつぶやくが、人となりが見えてくるこの方法は住民の心をつかみそう。(尼崎市社協)
○「オンライン終礼」毎日 4 支部の 1 層 Co と 2 層 Co は 17 時からオンラインで終礼(報告会)を実施。離れていても顔を見ながらの情報交換で職員もつながります。(三田市社協)

行政・多機関との工夫

ここがポイント!

多様性

○「給食でつなぐいながわの輪」：世代間交流
町事業「高校生フォーラム」で優勝した高校生のアイデア(学校給食を食べながら高齢者と小学生の交流を図る)を社協が受託。学校や老人クラブと Co のつながりを活かし大島小学校で実現。給食で生まれたつながりが、その後、子どもの登下校の緩やかな見守りにもつながっています。(猪名川町社協)
○「わくわく貴来喜」まちに大学生がやってくる：兵庫県立大学の看護学部と地域がコロナ前からのつながりを切らず、オンラインで地域の 2 会場をつなぐ離れ業を実践。画面をみて「あの人がおる!生きとった〜」(明石市社協)

【編集後記】今回は、2 月・3 月を合わせた第 15 号を拡大版にしました。この一年は、コロナ禍に始まり、コロナ禍で終わりそうです。しかし、こんな時だからこそ、今までと違う視点、方法で振り返る機会をいただくことができました。まだまだ、コロナ禍が続くような気配の中で、専門職として何をしなければならぬか。もう一度考えてみたいと思います。今まで通りでは、住民の生活も命も守れない。そんな緊迫感もあります。「手をつなぐ」チャンスは「いま、でしょう!」